

[論文]

古代教会における説教 オリゲネスとアウグスティヌスを手掛かりに¹

出村 みや子

序

古代教会史の分野ではアウグスティヌスをはじめとして説教 (sermo) の研究が最近になって盛んに行われており、日本でも教文館から『世界説教史 1 古代-14 世紀』と『シリーズ・世界の説教 古代教会の説教』が相次いで刊行され、これまで論じられることのほとんどなかった古代教会における説教の成立と発展の問題に徐々に関心が集まっている²。

この研究の目的は、東方教会と西方教会の伝統の成立に多大な影響を与えた古代末期の神学者オリゲネス (185 頃-254 頃) とアウグスティヌス (354-430) の説教を手掛かりに、古代教会における説教の役割について考えることにある。二人は古典古代の文化的伝統とヘレニズム世界の多様な宗教思想が併存・競合する古代末期にあつて、聖書解釈を通じてキリスト教信仰の確立に多大な貢献をした聖書解釈者、神学者である。古代末期の教会は共通の神学的課題 (グノーシス主義の二元論と聖書解釈の問題) に直面していた。オリゲネスがその後の彼の神学の評価を巡る論争 (オリゲネス論争) においてしばしば誤解され、6 世紀には異端者として断罪されたが、それは彼の三重の聖書解釈方法、特に彼のアレゴリー解釈が、同時代のヘレニズム哲学者たちやグノーシス主義者たちによって、聖書を含

¹ この論文は、「教会と説教」を主題として開催された、総合人文学科主催の第 9 回教職研修セミナー (2015.8.31) で行った講演に手を加えたものである。なおオリゲネスの説教に関しては、出村みや子「説教者 (homilist) としてのオリゲネス」、『キリスト教文化研究所紀要』第 31 号、2013 年 6 月、19-39 頁においてすでに論じられているので、参照されたい。

² E. ダーガン著『世界説教史 I 古代-14 世紀』(中嶋正昭訳) 教文館、1994 年、小高毅編『シリーズ・世界の説教 古代教会の説教』教文館、2012 年。なおアウグスティヌスの説教については、2006 年と 2007 年にキリスト教文化研究所が主催した二つのファカルティ・フォーラムの講演記録を参照されたい。ポーリーン・アレン「初期キリスト教世界における説教者と聴衆」(出村みや子訳)、『東北学院大学論集 教会と神学』第 44 号、2007 年 3 月、1-26 頁、ジェフリー・ダン「不正な富 (ルカによる福音書 16 章 9 節) についてのアウグスティヌスの説教 —— 初期キリスト教における富者と貧者の構造 ——」(出村みや子訳)、『東北学院大学論集 教会と神学』第 45 号、2007 年 11 月、1-20 頁。

む当時の多様な神話に適用された解釈方法でもあったからであった³。しかし以下に見るように、彼の説教には、ユダヤ教の会堂との競合の中で、キリスト教に独自の聖書解釈を聴衆に伝えようとする意図が認められる。また若き日のアウグスティヌスはグノーシス主義の一派であるマニ教に9年間も留まっていたが、それは知的探究心の旺盛な彼は、哲学的探究の途上で旧約聖書の中に霊的な知恵を見出そうとして失望したためであった。彼がマニ教からカトリック教会に立ち返るきっかけが、ミラノの司教アンブロシウスの説教における旧約聖書の霊的解釈であった。この解釈法は、かつてオリゲネスが当時のグノーシス主義およびユダヤ教との競合の中でキリスト教の聖書解釈を確立するために、パウロに依拠して聖書解釈に適用したもので、その後の東方教会の神学的伝統に継承されている。

アウグスティヌスの初期の著作には、アンブロシウスやヒエロニムスを経由してオリゲネスと共通の聖書解釈が見られるものの、その後アウグスティヌスは北アフリカ、ヒッポの司教として独自の神学を展開する。彼の時代はキリスト教がローマ帝国の公的宗教となり、司教に様々な指導的役割が期待された時代である。アウグスティヌスの説教には、北アフリカの教会を取り巻く困難な状況と取り組む司教としての苦闘の跡が認められるが、それはまた現代世界の直面する問題でもある。

そこで今回はオリゲネスとアウグスティヌスの説教から、教会共同体の存立を脅かす諸問題の解決のためにパウロの言葉が重要な役割を果たしていた箇所を焦点を当てて考察し、二人の説教の実例から見えてくる、古代教会における教会を造り上げるための努力や、当時の聴衆と説教者の関係について学びたいと思う。

1) オリゲネスの説教と聖書の霊的解釈法

オリゲネスは、その後半生において多くの説教を行ったことが知られているが、彼以前に教会で行われた説教の証言は非常に少ないゆえに、彼がアレクサンドリアを退去してカエサレイアに移動した後に開始された説教者としての活動を明らかにすることは、教会史における説教の成立と発展の歴史を知る上で非常に重要であると思われる。なぜなら説教のスタイルは大きく *homilia* と *sermo* に分かれ、後にそれぞれが「講解説教」と「主題説教」と呼ばれるようになる説教史の展開において、「ホミリア」に区分される彼の説教は、「旧約・新約聖書の本文に基づき本文の使信を展開する」講解説教の嚆矢とみなすことができ

³ この問題について詳しくは、拙著『聖書解釈者オリゲネスとアレクサンドリア文献学』知泉書館、2011年を参照。

るからである⁴。

オリゲネスはおそらく 600 近い説教をしたと考えられているが、今日まで残っている説教の数は 279 である⁵。それらのうちで元来のギリシア語で伝えられているのは 21 のみで、『エレミヤ書ホミリア』（そのうちの 12 がヒエロニムスのラテン語訳と並行）と、『エン・ドルの口寄せ女のホミリア』（サムエル記上、28：3-25）である。またギリシア語断片の『ルカ福音書ホミリア（35）』と『マタイ福音書ホミリア』が発見されている。他のオリゲネスの説教の多くは今日ラテン語訳で現存し、ルフィヌスがその多くをラテン語に訳している。現存しているのは『創世記ホミリア』が 16、『出エジプト記ホミリア』が 13、『レビ記ホミリア』が 16、『民数記ホミリア』が 28、『ヨシュア記ホミリア』が 26、『士師記ホミリア』が 9、『詩編ホミリア』が 9 である。さらにヒエロニムスによるラテン語訳は、『雅歌ホミリア』が 2、『イザヤ書ホミリア』が 9、『エレミヤ書ホミリア』が 14、『エゼキエル書ホミリア』が 14、『ルカ福音書ホミリア』が 39 である。その他にもポワティエのヒラリウスによる 20 の『ヨブ記ホミリア』が断片的に伝わっており、訳者不詳のラテン語訳説教もいくつか残っている。

オリゲネスが後年説教を行ったカイサレイアは、1 世紀末から 2 世紀初めのうちは異教的要素が強いことで知られるが、2 世紀の終わり頃にはユダヤ人がカイサレイアに移住し始め、やがてこの地でラビの学校が発展を見た。オリゲネスの聖書解釈には未だユダヤ教との境界が曖昧だった教会の状況が反映している。教会史家ソクラテスは、オリゲネスがカイサレイアの教会で司祭として立てられると、受難週の水曜日と聖金曜日に開催される典礼の集会で説教を行ったことを伝えている⁶。オリゲネスはまたいくつかの機会にエルサレムで説教を行い、アラビアで開催された教会会議でも説教をしたことが知られている⁷。

ノートンによれば⁸、オリゲネスの時代のキリスト教共同体では三つのタイプの典礼の集会在持たれており、一つは成立が最も古い、シュナクシスと呼ばれる日曜朝の集まりであり、その集会では聖餐式が執り行われた。日曜の聖餐の集まりには旧約聖書と使徒書、福

⁴ 以上の区分は『岩波キリスト教辞典』の「説教」の項目による。「そのスタイルは大きく分けて 2 つの傾向をたどることになった。一つは旧約・新約聖書の本文に基づき本文の使信を展開するもので (homilia)、後に講解説教と呼ばれた傾向である。もう一つは信仰生活や社会の諸問題を中心に引き上げキリスト教の立場からの対応を促すもので (sermo)、後に主題説教と呼ばれた傾向である」(677 頁)。また、小高毅編『シリーズ・世界の説教 古代教会の説教』16-19 頁参照。

⁵ オリゲネスの現存する説教について McGuckin, ed., *The Westminster Handbook to Origen*, Westminster John Knox Press, 2004, pp. 28-29 を参照。

⁶ ソクラテス『教会史』5.22.

⁷ エウセビオス『教会史』VI, 19; 33; 37.

⁸ Pierre Nautin, *Origène, sa vie et son oeuvre*, Paris, 1977, pp. 389-409.

音書の三つが朗読された。二つ目は水曜と金曜の集会で、こちらは恐らくそれらの日に実践されていた断食が終わる3時頃に行われたと考えられており、この集まりにも聖餐式が含まれていた。聖餐式を伴うこれらの集会でも福音書が朗読された。そして三つ目が日曜以外の毎日の朝に執り行われていた早朝の集まりで、この時には聖餐式は行われなかった。ここでは常に旧約聖書のみが朗読されたが、それは受洗者のみならず、洗礼志願者もこの集会に参加しており、彼らにはまだ新約聖書への参与が許されなかったためである。

オリゲネス パウロの範例に従って聖書を靈的に解釈する

オリゲネスの聖書解釈の意義は第一に、彼が聖書正典の範囲がいまだ流動的であった時代に聖書研究ということで、聖書全体の体系的な研究を意図していたことにある。マンリオ・シモネッティが強調したように、「彼以前に旧約聖書と新約聖書全体に体系的な注解を施した者は誰もいなかった」のであり、彼はいくつかの知恵文学（知恵の書やヨブ記）に最初に注目した神学者である⁹。オリゲネスは『諸原理について』第4巻2章4においてアレゴリー解釈を含む聖書解釈の方法を導入するに当たり、「しかるに聖書をいかに読み、それらの意図を理解すべきかについての方法であるとわれわれがみなすのが、御言葉それ自体から辿られる方法である」と述べており、これによってオリゲネスは、聖書をいかに読み、理解すべきかについての方法については、聖書のテキストそれ自体からその手掛かりを得るべきであるという、聖書テキストの内在的理解の原則を示したのである。

第二に、彼の聖書解釈にはパウロ神学、特にパウロ（とその後継者）の聖書解釈の範例が多大な影響を及ぼしていることである。オリゲネスは聖書箇所により深い意味の探究法を、キリスト教外のアレゴリー解釈との対比においてパウロのガラテヤ書4:24の *ἀλληγορούμενα* に基づいて確立する試みを行い、後代の聖書解釈に大きな影響を与えたのである。『諸原理について』第4巻2章6においてオリゲネスは以下のように彼の解釈の方法を特徴づけている。

『諸原理について』第4巻2章6 「彼 [パウロ] は確かにガラテヤの人々に宛てた手紙の中でも、律法を読んだと思っても、書かれたものの中に比喩があることを認めないために、律法を理解していない人々を叱責して彼は、「律法の下にとどまっていたと思う人たちよ。わたしたちに応えてください。あなたがたは、律法の言うことを

⁹ Manlio Simonetti, *Biblical Interpretation in the Early Church*, Edinburgh, 1994, pp. 39-40.

聞かないのですか。アブラハムには二人の息子がおり、一人は女奴隷から生まれ、もう一人は自由な女から生まれたと記されています。女奴隷の子は肉によって生まれたのに対し、自由な女の子は約束によって生まれました。これは比喩として語られたものです。すなわちこの二人の女は二つの契約のことであり」(ガラ4: 21-26)云々と言っている。そこで彼によって語られた言葉のそれぞれに注意を払わねばならない。彼は「律法の下に留まっている人たち」とは言わず、「律法の下に留まっていたと思っている人たちよ。あなたがたは律法の言うところを聞かないのか」と言っているのだから。「聞く」とは、理解し、認識するとの意味である」¹⁰。

以下に示すのは、オリゲネスがパウロによる聖書解釈の範例を示しているホミリアである。オリゲネスにとってパウロによる律法の霊的解釈は、未だ人々の目には未分化に見えたユダヤ教の会堂からキリスト教会を区別するための重要な手立てであった。

『出エジプト記ホミリア』V, 1「信仰と真理における異邦人の教師なる使徒パウロは、自分が異邦人の中から集めた教会に対して、律法の書をいかに解釈すべきかを教えました。これらの書は他の者たちからも受け入れられていますが、かつては異邦人には知られておらず、全く見慣れぬものでした。彼は、教会が外來の教えを受け入れながら、それらの教えの原則を知らないゆえに、他国の文書について混乱状態に陥ることを恐れていました。彼はそうした理由で、わたしたちが他の箇所にも同様の事柄があることに気づくように、いくつかの解釈の実例を示しましたが、それはわたしたちがユダヤ人のテキストや文書を模倣することで自分たちが弟子となったなどと信じないようにするためでした。従って彼は、彼らが律法を理解する方法を通じてキリストの弟子たちを会堂の弟子たちから区別することを望みました。ユダヤ人はそれを誤解することにより、キリストを拒絶しました。しかしわたしたちは律法を霊的に理解することで、まさに律法が教会の教えのために与えられたことを示しているのです……。そこで、教会の教師なるパウロから聖書解釈についてのそのような教えを受けたわたしたちはどうすべきでしょうか。わたしたちに伝えられたこの規則を、同様の仕方で他の箇所にも適用することは正しいと思われませんか。それともある人々が望んでいるように、このように偉大な使徒が教えたこれらの事柄を捨てて、わたしたち

¹⁰ テキストは、*Origène Traité Des Principes Tome III* par H. Crouzel et M. Simonetti, SC, 1980, pp. 318-327 による。

は再び「ユダヤ教の伝説」に戻るべきでしょうか。もしこれらの事柄において私がパウロとは相違しているなら、私は「キリストの敵」の手助けをすることになるように思われるのです」。

オリゲネスの説教から知られる当時の教会の様子

オリゲネスのホミリアはまた、当時の教会の聴衆の様子をも伝えている。彼が説教を通じて聴衆に伝えようとした聖書解釈法は、必ずしも当時の聴衆に受け入れられてはいなかったようであり、説教者としての苦労があったことがわかる。

『創世記ホミリア』10.1 「あなたがたが神の言葉を聞くために集まらない時には、悲しみと嘆きを引き起こさないでしょうか。しかもあなたがたは祝祭日にはかろうじて教会に向かいますが、それはみ言葉を聞きたいからというよりも、祝祭を好み、何らかの仕方で共通の気晴らしを得んがためなのです」。

同書 10.3 「祝祭日にしか教会に来ない方々よ、他の日々も祝祭日ではないのですか、わたしに答えてください。……キリスト教徒は日々子羊の肉を食べますが、それはキリスト教徒が日々み言葉の肉を食べるとのことなのです」。

『出エジプト記ホミリア』12.2 「あなたがたの中には、朗読に選ばれた聖書テキストを聞くや否や、直ちに退出してしまう人々がいます。……また教会内で聖書テキストが朗読されている間、辛抱強く待たない人々もいます。またそれらが読まれているかどうかも気づかずに、主の家から最も遠い隅でもよやま話に夢中になっている人々もいるのです」¹¹。

2) 初期アウグスティヌスにおける旧約聖書の理解 (アンブロシウスの霊的解釈の影響)

旧約聖書の解釈が古代教会にとって依然として困難な課題であったことは、アウグスティヌスの事例からも知られる。マニ教に9年間もとどまっていた彼は386年、32歳の時にアンブロシウスの説教から聖書を霊的に解釈することを学び、パウロの手紙を読み理解するようになる。そして苦悶の末にミラノの庭園で回心し、翌年にアンブロシウスから

¹¹ テキストは、L. Doutreleau, ed. and trans. *Origène : Homélie sur la Genèse*, SC, vol. 7bis, Paris, 1976. なお英訳テキストは Origen, *Homilies on Genesis and Exodus*, trans. by R.E. Heine, Washington, D.C., 1981.

洗礼を受けるのである。

『告白』第5巻第14章24 「わたしは、アンブロシウスが語ることを学ぼうとはせず、ただ彼がどのように語るかを聞くことに意を用いていました、あなたに向かう道が人間に開かれることに全く絶望していたわたしにとっては、このような空しい関心だけが残されていました。……

まずはじめに、彼の語っていることも弁護されうる、ということがともかく分かりはじめました。わたしはカトリックの信仰はマニ教徒たちの非難に対して何も反駁出来ない、と考えていましたが、その信仰を弁護することは、必ずしも恥知らずなことではない、と思い直すようになりました。特に、旧約聖書の謎めいた章句が一箇所、また一箇所と解かれるのを聞いたからです。わたしは、これらの箇所を文字通りに受け取っていたため、殺されてきました。そこで、旧約聖書の多くの箇所が霊的に解釈されるのを聞いて、律法と預言を嫌悪し嘲笑する人々に立ち向かうことは絶対不可能だと信じていたわたしの絶望を、少なくとも咎めるようになりました。

けれども、カトリックの道の方も、非難を十分明瞭に反駁する自らの学識ある弁護者を持つことができた、ということで、わたしがその道を進むべきだ、とはまだ思いませんでした」。(『アウグスティヌス著作集』5-1 所収の宮谷宣史訳)

『告白』第6巻第4章6 「わたしはまた、律法と預言の旧約聖書が、以前、わたしに不合理に思われたような視点から読まれるべきものではないことを知り、喜びました。わたしはあなたの聖徒たちが、わたしと同じように不合理と考えていると思い、非難していた訳ですが、彼らは実際にはそのようには考えていませんでした。

それからわたしはまた、アンブロシウスが民衆に対する説教の中でしばしば「文字は殺し、霊は生かす」(II コリ 3, 6) という言葉を、聖書解釈の規則としてとても熱心に勧めていたのを聞いて、嬉しく思いました。それは、彼が、文字通りに取れば、邪悪なことを教えているように見える聖書の箇所を、霊的に解釈して、神秘の覆いを取り去り、その意味を明らかにしてくれたからです。彼の言うことが本当かどうかはまだ分かりませんが、わたしがひっかかりを感じるようなことは何も言いませんでした」(宮谷宣史訳)。

以上のアウグスティヌスの『告白』の箇所から、当時のカトリック教会における旧約聖

書の解釈が彼にとって大きな躓きとなっていたことや、その後アンブロシウスやヒエロニウムスを経由してオリゲネスと共通の聖書解釈（霊的解釈）に至ったことがわかる。その後アウグスティヌスは時の経過につれて聖書解釈への理解を深め、『未完の創世記逐語解』において字義的、歴史的解釈を試みる。そして北アフリカ、ヒッポの司教となった後は、主として司牧活動に利用するために聖書解釈を説教において独自に展開するようになる¹²。彼の時代はキリスト教がローマ帝国の公的宗教となり、司教に様々な指導的役割が期待された時代である。

3) アウグスティヌスの説教とその特徴¹³

アウグスティヌスは40年間をヒッポ・レギウスの教会の牧者として説教に従事しつづつ過ごし、その生涯に約4千の説教をしたと言われている。しかし現在彼の名の下に伝えられている数は千百余で、真正なものはこの半数に過ぎない。彼は旧新約聖書のすべての巻を説教で取り上げているが、特に詩篇全体について200回以上も語り、ヨハネ福音書からの講解説教は120回にわたる。

アウグスティヌスの説教は通常は聖日に教会暦に従い、あるいは諸聖徒の祝祭日に、ある時は聖書の一つの巻を連続的に講解したが、種々様々なる聖句を選んだり、また信条を教理的に解説したり、そのつど自由に様々な主題について説教していたことは特筆すべきである。古代教会においては説教の前に、朗読者によって聖書が読み上げられていた。たまたま、朗読者が指定された箇所を間違えて別な章句を読んでも起こったが、その際にアウグスティヌスは、「ただ今読み上げられた箇所は、私が選び、準備して話そうとした聖句とは異なっております。しかし、神の御心が働いているかもしれませんので、私の思いにではなく、神の導きに従い、ここから話すことにいたしましょう」と語り、実際に予想していない箇所について説教をすることもあった。また礼拝に予期していなかったマニ教徒やドナトゥス派の人々が訪ねてきたときにも、準備していたのは別の主題について話を試みるということがあったという。

以下に取り上げるのは、アウグスティヌスが長年にわたって取り組んだ、当時の教会に

¹² オリゲネスと初期アウグスティヌスの聖書解釈には多くの点で共通性が認められるものの、その後のオリゲネス論争の影響でアウグスティヌスは独自の解釈を展開した。この問題について詳しくは、M. シモネッティ前掲書、104-105頁、および Alfons Fürst, *Von Origenes und Hieronymus zu Augustinus*, De Gruyters, 2011, 特に“Origenes in den Werken Augustinus”, 487-500を参照。

¹³ 以下の司教アウグスティヌスの説教活動について、宮谷宣史『アウグスティヌス』講談社学術文庫、2004年、P. ブラウン『アウグスティヌス伝 上下』（出村和彦訳）、教文館、2004年を参照。

とって解決困難な諸問題を扱った際の説教である。最初に取り上げるのは貧困の問題であるが、それはピーター・ブラウンが指摘しているように、アウグスティヌスの説教及び書簡において「貧者」との関わりは重要な主題であり、それはローマ帝国のキリスト教化に伴い、「貧者を愛する者」という役割が日常的に司教に期待されるようになったためである。教会に様々な特権が賦与され、かつ社会の上層の人々が次第に教会に帰依するにつれて、キリスト教的施与にも変化が生じ、「貧者への配慮」は特権への見返りという意味を帯びるようになっていたのである¹⁴。

説教 85 「……すべての皆さん、どうか神の言葉に「聴き従うことに」よって心の一つ (concordate) にしてください。富んでいる人たちも貧しい人たちも共に神に造られたからであります。……確かにこの世においては一方は困窮し、他方は多くを持っていることでしょう。しかし「主はどちらも造られたのです」。多く持っている人たちを介して神は困窮している人たちを助け、持っていない人たちを介して神は多く持っている者を吟味し試されるのです。わたしたちはこれまでそのことを聴き、語りました。ですから、それを心にしっかりと留めましょう。援助しましょう。祈りましょう。そうしたことを達成しましょう」(『アウグスティヌス著作集』22 所収の茂泉昭男訳)¹⁵。

次に取り上げるのは、411年6月にカルタゴで開催されたドナティストとの比較協議会の後、アウグスティヌスがヒッポに帰還してドナティストについて語った説教である。これは、上記の説教 85 に見られるのと同様の貧者と富者の協働のテーマが語られた直後に置かれ、ドナティスト問題が当時の北アフリカに住む人々の間の貧困や経済的格差と結びついていたことがわかる。この説教に見られるアウグスティヌスとドナティストとの関係について、P. ブラウンは次のように述べている。「アウグスティヌスは、宗教裁判についての最初の理論家と言えるかもしれない。しかし、彼自身が、大審問官の立場に立つことはなかった。というのは、中世の司教とは違って、彼は、完全にキリスト教化した社会の中で、体制を維持することに没頭していたわけではないからである。彼が直面していたのは、社会の体制全体から憎まれ恐れられていた少数のセクトではなく、自らの会衆とほぼ

¹⁴ Poverty and Leadership in the Later Roman Empire, 2002 (邦訳『貧者を愛する者 古代末期におけるキリスト教的慈善の誕生』(戸田聡訳) 慶応義塾大学出版会, 2014年)

¹⁵ 貧困をテーマとしたアウグスティヌスの説教について、出村和彦『アウグスティヌスの「心」の哲学：序説』岡山大学文学部研究叢書, 2011年, 148-152頁を参照。

同じ規模の、多くの点で自分たちとよく似ているキリスト教徒の集団であった。こうして、アウグスティヌスにとっては、宗教的な強権発動は、つねに、純粹に矯正的な処置であり続けた]¹⁶。豊かな者と貧しい者が互いに重荷を負い合うという彼のヴィジョンがどの程度当時の状況にとって有効であったかは、現代の視点からは不明であるが、彼がパウロの言葉によってドナティストとの愛による一致をなお希求していることに注目したい。

説教 164, 7 「さて、あの戒めにふたたび戻りましょう。「自分の重荷を互いに負いなさい」(ガラ 6: 2)。あなたが持っているのはキリストの荷であり、それによって、他の人と一緒にその人自身の荷を負うことができます。その人は貧しく、あなたは豊かです。その人の重荷とは貧困であり、あなたはそのような重荷を持ったことはありません。……貧困はわたしの重荷ではなく、わたしの兄弟の重荷です。豊かな者たちがあなたのいっそうの重荷でないかを考えなさい。あなたは貧困を重荷として持ったことはないが、豊かさを持ったことはあります。あなたがよく理解するなら、それが重荷なのです。その人も重荷を持っており、あなたもそれとは別の重荷を持っている。あなたはその人と一緒に負いなさい。その人はあなたと一緒に負いなさい。そうして、あなたがたは互いにあなた方の重荷を負うことになるのです。貧困という重荷とは何でしょうか。それは何も持っていないことです。豊かさという重荷とは何でしょうか。それは必要以上に持っていることです」……。

「このように言っている彼ら [ドナティスト] があなた方を騙すことがないように。彼らは言います。わたしたちは聖なる者であり、あなたがたの荷を負いません。だから、わたしたちはあなたがたと交わりません。そのような大いなる者たちは、分離という荷を負っており、その大いなる者たちは排除という荷を負っている。彼らは、分離主義という荷を、異端という荷を、紛争という荷を、敵意という荷を、誤った証言という荷を、捏造した告訴という荷を負っています。わたしたちは、わが兄弟たちの肩から、こうした荷を取り上げようとつとめ、今もつとめています。彼らは自分たちどうして抱き合うのを愛して、いっそう小さな者になるのを拒んでいます。そうした荷によって膨れ上がっているからです。……

あなたは、しかしこのわたしは、他の人々の罪とは交わっていない、と語ります。

¹⁶ 引用は、P. ブラウン『アウグスティヌス伝 上』247-8頁。また『書簡』93.2.3でアウグスティヌスはドナティストに対する態度として、「というのは、もし、彼らがただ恐れられるだけで、何も教えられないならば、このことで、私たちがただの暴君であると言われても弁解の余地がないであろう」(引用は同書 248頁)と述べ、良心的な態度をとるように努めていたことを示している。

それでは、わたしがあなたに向かって、他の人々の罪と交わりなさい、と語っているかのようです。それはわたしの主張ではありません。わたしは、使徒が何を言おうとしているかを知っています。そのことをわたしも言っているのです。まさに他の人々の罪のために、もしもそれらが実際そのようであって、ましてあなたのものではないならば、あなたは、羊と山羊が混じり合っている神の〔民の〕群れを見捨てるべきではありません。麦藁が脱穀されている限り、主の脱穀場を去るべきではありません。主の網が良い魚も悪い魚も両方とも岸に引き上げる限り、主の網を破るべきではありません。あなたは、では、どのように悪しき者であると知っている人間を耐えるべきなのか、と語ります。あなたは、自分自身を外に追い出すよりも、その者に耐えるほうがよいのではないのでしょうか。ごらんください。いかにあなたが耐えるべきかについて、使徒がこのように言っていることに注意を向けるべきです。「それぞれが自分の重荷を負うべきです」（ガラ 6: 5）。この考えがあなたを自由にするでしょう」（『アウグスティヌス著作集』26 所収の上村直樹訳）。

次に示すのは、人間の自由意志と恩恵、幼児洗礼の問題をめぐるペラギウス派との論争を反映した説教である。ペラギウス派が人々に対して道徳的完成を義務づけるような運動を展開したことは、北アフリカの司教たちが長年行ってきた幼児洗礼の習慣を覆すものであり、この問題も北アフリカの教会を揺るがす困難な問題である。アウグスティヌスは、罪なき乳児の死という当時の現実問題に着目して原罪論として知られる教義を確立することになったが、それは単に人を罪に定めるためではなく、パウロの言葉に依拠しながら、キリストにおける恩恵をも強調していることは重要である¹⁷。

説教 165, 6 罪と死、原罪論の問題（ペラギウス派に対して）

「しかし、彼らは何を言うのか。わたしたちが聞いたように、彼らの何人かは、もちろん自らの報酬のかわりにすべての人間は死ぬ。罪を犯したのだから。実際、罪からやってくるのでなければ死はなかった、と論ずるのです。たしかに、このことは正しく真実に言われたのです。罪から来るものでなければ、死はなかったでしょう。しかし、わたしがこのことを聴くときに称賛するのは、あの最初の死とその最初の人間の罪とを見つめているか

¹⁷ アウグスティヌスの原罪論とパウロ解釈の問題について、M. シモネッティ前掲書、130-132 頁、およびイレイン・ペイゲルス著『アダムとエバと蛇——「楽園神話」解釈の変遷』（絹川久子・出村みや子訳）ヨルダン社、1993 年 6 月を参照。

らです。使徒の言葉に耳を傾けているからです。「アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです」(I コリ 15: 22)。「一人の人によって罪がこの世に入り、罪によって死が入り、こうして死がすべての人に及んだ。すべての人が罪を犯したからです」(ロマ 5: 12)。すべての人は、その一人だったのです。あなたが人間の死は罪からであると語っているのを、わたしが聞くのはそういうことなのではないでしょうか。ある者は、いいえ、と言います。では、あなたは何を語っているのでしょうか。神はすべての人間が現に不死であるように造るのです。なんと驚くべき斬新な考えだろうか、なんと言ったのでしょうか。その者は、もちろん、すべての人間を神は不死なるものとして作るのです、と言います。それではなぜ乳児は死ぬのでしょうか。つまり、もしもわたしが、なぜ大人たちは死ぬのでしょうか、と言えば、その者は、罪を犯したからです、と言うことでしょう。したがって、より年嵩の者たちについては、わたしは議論することはしません。あなたに反対するため、わたしは乳児らを証人として召喚するでしょう。かれらは話すことができず、あなたに有罪を宣告します。沈黙して、わたしが言っていることを保証します。ごらんください、乳児は明らかにその働きにおいて無罪であり、最初の人間から伝わったものより他には、自らには何も罪あるものを持っていません。キリストの恩恵を必要とするのは、アダムにおいて死んだ者がキリストにおいて生かされるためです」(上村直樹訳)。

アウグスティヌスはペラギウス派との論争を通じてキリスト教の中心的教えの「罪と恩恵」の教義を確立し、その後の教会史において「恩恵の博士 (doctor gratiae)」と呼ばれるようになった。しかし現代の視点から見ると、パウロの言葉から「罪の遺伝」の思想を読み取ることができるかどうか、検討の必要があると思われる¹⁸。

まとめ

古代教会の説教におけるパウロの意義に焦点を当てながら、オリゲネスとアウグスティヌスの説教を概観し、教会共同体の形成において説教がそれぞれの時代にどのような役割を果たしていたかを比較検討した。説教はオリゲネスにとっては、ユダヤ教の会堂と未だ未分化であった当時の教会の状況において、聖書をいかに理解するかという神学的課題で

¹⁸ ペラギウス論争について、金子晴勇『アウグスティヌスとその時代』知泉書館、2004年、226-235頁、および荒井献・出村みや子・出村彰『総説 キリスト教史1 原始・古代・中世篇』日本キリスト教団出版局、2007年、183-187頁を参照。

あり、彼はパウロの範例に倣って靈的解釈を行う方法を確立した。オリゲネスの説教には、聴衆に対してキリスト教に独自の聖書解釈法を伝えようとする聖書解釈者、教師としての姿勢が反映されている。アウグスティヌスにおいても、マニ教の影響下にあった初期には聖書解釈の問題は重要であり、彼はアンブロシウスの説教を通じて聖書の靈的解釈を知り、回心に至った。その後ヒッポの司教として行った彼の説教には、当時の教会の置かれた具体的な問題に指針を与えるためにパウロの言葉が引用されており、聖書解釈が司牧的目的を有する説教において独自の発展を遂げたことがわかる。ここで取り上げた貧困やドナティスト問題、ペラギウス派との論争はいずれも解決困難な問題であったが、アウグスティヌスは説教を通じて当時の司教として会衆の指導のための極めて実践的な役割を果たそうとしていたことが確認されるのである。